外資排除下の日本産業革命──その資金はどこから来たか？
的防衛となった。

しかしながら、そうした防衛によって外資を排除する政策は、外資の導入による近代の工業化を阻むことを意味し、当時の国際的な防衛に対する政策であった。それは、明治政府の御府外人に言わせるとなんでもない誤った政策であり、アメリカ政治家のケブン、イギリス銀行家シャープ、フランス人法律家スプ、ドイツ人科学者ワーグナーらは、異口同音にこのままでは日本経済の近代化政府はそうした批判を受けて、八七年の二回行ったあとは、八九九年まで行わず、外国人による民間企業への直接投資も、八九九年まで禁止した。そして、同年の外資解禁以降も、民間への外資輸入は予想外に少なくなったので、明治期に進行した産業革命は、基本的には外資抜きの自力によっ行われたのである。

もっとも、外国貿易は、明治中頃まで、外国商社や銀行・海運業によって主に担われていたから、外資への依存度はその分だけは日露戦争借金のように新たな外資導入の役目を果たし、高いかったが、日露戦争借金は一種の外資導入の役目を集めた。
株式会社、③民間銀行の三つが主要なルートであった。①は戦前から
その定説で、官営工場や鉱山を政商に払い下げて財閥が生まれたこ
とを頼視する説であるが、産業革命の研究が進み、民間大企業の実
態が明確されるると、②（四）結論で触れるように製鉄業は別として、
紡績・鉄道、海運などの大企業は株式会社制度を使って、民間から資
本を吸い込んでいたことが分ってきた。さらに、その民間株式の研究が
進むと、彼らは自分の蓄積資金だけではなく、③銀行から株式担保で
多額の資金を借り入れて投資を行ったことも判明した。かつての推計
では、一八九六年から一九一五年にかけての二〇年間に、民間
間銀行貸出に占める株式担保金融の比重は四〇％から五〇％へと半
減したとされているが、推計上の誤りを訂正した新推計によれば、この
間の株式担保金の推移は一貫して四〇％前後であり、中核に大規模
銀行の株式合計の四〇％が銀行に担保として入っており、産業会社
株に限ればその過半が銀行の担保になっていたものと推定される。

（石井寛治「二一五」）つまり、株式投資家以外の銀行預金の枠
内でも有力な株主層が存在するように見えるが、そうした株主層は
銀行によってはほぼ底上げされていることを見逃すことはなか
ならない。

株主の職務は、かつては、地主の役割が中心だったという主張。中村
政則=九六八や大名族の資金が中心だという説（齊藤拓也=九
八二）もあったが、今では商人（金融業者を含む）の資金が番か
どに割合が上がっている。石井寛治「二一五」株主全体のうち個人株主
の割合については、明治中期から昭和初期まででは、個人株主が中
心であった。所得税に関する統計によると、一九二五年当時、全配
当のうち個人株主への分は七一人九％を占め、一九三五年にも五
〇一人二％を占めていたのである（石井寛治「二一五」）。かつては有
力会社の大株主データによって個人株主のシェアが昭和初期に
大きく違うが、一九三六年には八一人台を占める法人株主によって
圧倒されたとみなす見解（志村嘉一=九六九、寺西重郎「二八二」）
があったが、そうした見解は全株主について成立立たないといえ
よう。

（二）幕末にかけての近世両替商の手形取引の拡がり
では、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
なのか。それとも明治維新以降に活動を始めた新興商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
のなか、彼を個人株主の中心は、近世以来の伝統的商人・金融業者
ものがどうか。宮本文太郎（九九九）は、明治の産業化を支える
資産家・企業家となったのは幕末維新期に台頭した新興商人だとい
う近世・近代の断絶説を批判した。宮本氏は全国長老若きを、開
港前の嘉永二年（一八四九）から嘉永五年（一八五二）の五時
点を選び、それぞれの上位二○○名の選挙を調べたところ
ある。嘉永二年の二三一家で明治五年にも掲載されたのは井家や
の湯家あるいは住友家など僅か二○○家の存在を突き止め、も
近世・資産家家のトップを占める両替商については、大坂の湯家と
京都市の三井家について経営帳簿による分析が行われてきたが、渋
家の場合が七○○年頃を境目に大名貸から大名貸専業へと転換し
たため、同氏の研究からも民間経済発展との関係を知ることができる
（安岡重明・九七○）。また、三井氏は大名貸には消極的であったが、幕府から
金を用いた融資の相手の両替商は三井からの借金で大名貸を行っ
たため、三井研究からも民間経済発展との関係をあまり知らない
こともできる（三井文庫編・一九八○）。幕藩体制を崩壊させる近代化へ
の道筋を金銭面から明らかにしえようとするならば、大名貸の行っ
ている関連部分に関する研究はほとんど行われてきなかった。

仮に三井の関係を検討した場合、大坂では商人ごとに商号名を
見ただければ、幕末時代の商人の Hoseki System が示す形で
大名層が手っ取り早く利用できた（作道洋太郎・一九七一）以下、遠距離の決
手が手っ取り早く行われた（作道洋太郎・一九九九）。
AⅠ. 遠距離手形決済（両替商抜き、為替手形）

AⅡ. 遠距離手形決済（両替商介在、為替手形）
AⅢ. 遠距離手形決済（横浜引取商・両替商・上方問屋）
近距離手形決済（小切手）

近距離手形決済は、小切手の決済手続きを簡素化するための制度です。小切手の額面が一定の限度を超えない場合は、直接店舗で決済することが可能で、手数料も通常の決済より安くなるため、便利な決済方法として広く使われています。

決済の手続きは、以下の手順で行います。

1. 決済の店舗に小切手を持ち込みます。
2. 市民が記入した小切手の額面が規定の範囲内であることを確認します。
3. 手数料を支払い、小切手を店舗側に渡します。
4. 店舗側が小切手の併用性をご確認の後、決済を行います。

このような決済手続きにより、小切手の使用が簡易化され、同時に利用者の利便性が向上していることから、近距離手形決済制度は非常に有用なものと言えるでしょう。
BII. 近距離手形決済（三井手形）

大阪内局（石井寛治二〇〇七）

幕開けて活発化したのが、大阪を中心、商人が両替商に小切手を預け、取引の契約を結び、両替商が商人に差し引くという形で行われる。大阪の両替商は、小切手の市場を形成し、商人と相手の取引を手助けする役割を果たしていた。江戸後期の三井大阪両替店は、商人相手の手形決済を務めていた。

最近の研究によれば、大阪の堂島市場で諸藩の蔵屋敷が発行する手形を預けた三井家と小切手を預けた長岡家は、両替商を介して取引を行っていた。江戸後期の三井大阪両替店は、商人相手の手形決済を務めていた。

慶応二年（1866）三井大阪両替店の「手形帳」を見るところ、主要な両替商は、大阪の堂島市場で諸藩の蔵屋敷が発行する手形を預けた三井家と小切手を預けた長岡家は、両替商を介して取引を行っていた。江戸後期の三井大阪両替店は、商人相手の手形決済を務めていた。

全国大会パネル報告二〇〇八

慶応二年（1866）三井大阪両替店の「手形帳」を見るところ、主要な両替商は、大阪の堂島市場で諸藩の蔵屋敷が発行する手形を預けた三井家と小切手を預けた長岡家は、両替商を介して取引を行っていた。江戸後期の三井大阪両替店は、商人相手の手形決済を務めていた。
B III. 近距離手形決済（小切手）

近世日本においては、不渡りの場合、裏書者は支払責任がない。手形を発行した者にまで追って責任が問われることになっていた。そのため、三井両替店では手形取引は自らの責任もなく問われないが、一般の業務では別個の世界の出来事と考えられていたようである。従来の三井両替店研究が、大名や商人への貸付業務に経済の近代化の先端部分の動きを見落としていた点で大きなか欠をあつたと言われなければならない。

B IV. 近距離手形決済（小切手）

大坂近郊（三日市、丹波郡）→大坂内（新小路地区）

文政九年から両替商を営んで成長した。高野商は近隣の上層農民や在郷商人の口座を開設させ、手形の振出を認める。同郷会の四九年までに、大坂両替商鎮被領兵衛と取引した。

B V. 近距離手形決済（小切手）

大坂近郊（三日市、丹波郡）→大坂市（中之町）

小西由兵衛町は事件発生時に手を抜けた。その後放漫経営に陥り破綻するが、かくの如く大坂近郊における両替商の発展可能性は如実に示すものと言えよう。
BⅥ. 近距離手形決済（=小切手）

【近距離手形決済（=小切手）】

大坂近辺農村では、大坂両替商の広告をもって手形決済が促進された。農村の酒造業者は、大坂の蓬莱家から手形で購入した酒を販売していた。蓬莱家は、酒造業者と酒販家が関係を密に結んでいた。手形決済は、酒造業者の経営に大きな影響を与え、蓬莱家が酒を大規模に手形で購入することができた。

BⅦ. 近距離手形決済（=絹札・市札）

【近距離手形決済（=絹札・市札）】

小切手は、大坂両替商の広告をもって手形決済が促進された。農村の酒造業者は、大坂の蓬莱家から手形で購入した酒を販売していた。蓬莱家は、酒造業者と酒販家が関係を密に結んでいた。手形決済は、酒造業者の経営に大きな影響を与え、蓬莱家が酒を大規模に手形で購入することができた。
明治零年代は「金融空白期」だったのか？

もともと、そうした幕末の経済の発展は明治初年にわたり折り合い、幕府側の両替商の倒産が続いた。金融の混乱が続いたため、新しい金融制度が導入されることが期待された。しかし、その期待は実現されることはなかった。明治初年には、外国で行われていた両替商の倒産が続いた。幕府は、この状況を改善するために、様々な金融改革を実施した。しかし、これらの改革は、その実効性を欠いており、明治初年には金融の混乱が続いた。
明治中后期に両替商の被害者を含む人々が、行政と司法の両方によって処理されることを恐れ、それが「分捕」行為の発生を繰り返す要因としてあげることができた。しかし、こうした説明には、銀行家が発した点について、実在の証拠は見当たらない。

明治四十年代には、両替商の多くが破綻を遂げることを恐れ、かつ銀行の信用を保つために、銀行はもとより普通の個人事業者も含め、一切の金融取引を中止する始末であった。銀行からも、この時期を代表する事例には、二・三の大規模な事例があげられる。

しかし、こうした説明には、銀行家が発した点について、実在の証拠は見当たらない。

明治中后期に両替商の被害者を含む人々が、行政と司法の両方によって処理されることを恐れ、それが「分捕」行為の発生を繰り返す要因としてあげることができた。しかし、こうした説明には、銀行家が発した点について、実在の証拠は見当たらない。

明治中后期に両替商の被害者を含む人々が、行政と司法の両方によって処理されることを恐れ、それが「分捕」行為の発生を繰り返す要因としてあげることができた。しかし、こうした説明には、銀行家が発した点について、実在の証拠は見当たらない。

明治中后期に両替商の被害者を含む人々が、行政と司法の両方によって処理されることを恐れ、それが「分捕」行為の発生を繰り返す要因としてあげることができた。しかし、こうした説明には、銀行家が発した点について、実在の証拠は見当たらない。

明治中后期に両替商の被害者を含む人々が、行政と司法の両方によって処理されることを恐れ、それが「分捕」行為の発生を繰り返す要因としてあげることができた。しかし、こうした説明には、銀行家が発した点について、実在の証拠は見当たらない。
四 結語
断絶説と連続説の止揚

（四）結語──断絶説と連続説の止揚へ

明治0年代以降に続々と誕生した近代的銀行のなかの一部が、両替商によって設立され、運営された。東京に設立された第一国行や安田銀行・新河岸銀行・横川銀行・中井銀行などの両替商によって設立されたが、近代日本の大台所である大阪では銀行を設立した両替商が多くあった。明治二五年大阪市本支店四店のうち、両替商のものが一四店あり、預金総額の四八％、貸出総額の五三％を占めていた。この数値には、明治二八年に設立された大阪市最大の住友銀行は含まれていないうち、預金総額の四八％、貸出総額の五三％を占めていた。この数値には、明治二八年に設立された大阪市最大の住友銀行は含まれていない（「三井銀行特227」）。現在の三菱バーニクスの歴史を見ると、三井東京銀行とみずほ銀行（第二勤銀）、富士（住友三井）の起源が両替商にまで遡り、三菱UFJ銀行（三菱・三和・東海）も、外資抜きの産業革命を遂行し得た秘密があったといえよう。

もっとも、そうだからと言って、近代日本の工業化が近世以来の商人的蓄積を用いてやすやすと達成されたと主張するつもりはないうち、それは、鎖国してきた日本と機械文明の西欧との生産面のギャップがきわめて大きく、それを簡単に埋めることができるわけにはいかない。外資を取り入れて断られ、政府自ら建設しなければならなくなり、それが当初は国債償還を使いつつもであったが、軍費にとどまらない。一九一年に目標の鋼材年産九万トンを達成するまでの設備投資と欠損補填回された一般会計から捻出しなければならなかった。一九三年に目標の鋼材年産九万トンを達成するまでの設備投資と欠損補填は、政府が約五〇〇〇万円（佐藤昌一郎〇〇〇三）を投資したが、それが一九九〇年の三菱住友に合併金を含む鉱山・造船・銀行等の投資合計四〇五〇〇〇〇円（石井寛治一九九一）を上回る金額であつ
日本学士院紀要 第七十四巻 第二号

【参照文献】
石井寛治 中國経済（〇〇〇）
三井化成工業 名古屋大学出版会
石井寛治 中国経済（〇〇〇）
三井化成工業 名古屋大学出版会

朝日新聞社編　九三〇　日本経済統計年鑑　同社
石井寛治 九八〇外国経済概論　中村政則　岩波書店　春日豊
作道洋太郎 九七九　近世浮世経済の研究　同社
石井寛治 〇〇〇・資本主義日本の経済史　岩波書店
加藤善一郎 〇〇〇　・明治維新史　石井寛治 〇〇〇

科学大学長　第二〇〇号　經濟論考　岩波書店
白川達夫 〇〇〇九〇・大正末期における経済的市場の展開　岩波書店
小田木有子 〇〇〇九〇・大正末期における経済的市場の展開　岩波書店

『三井化成工業』名古屋大学出版会
『三井化成工業』岩波書店

『三井化成工業』名古屋大学出版会
『三井化成工業』岩波書店
I then discuss cases of settlement among merchants by bills of exchange in Kamigata in the late Edo era. Such settlements became common in Osaka as well as its suburbs, thereby reducing the loan interest rate to approximately 6%, which was almost half of that in Edo.

In Osaka, bills of exchange could be settled by many moneychangers who were further controlled by the biggest moneychangers, particularly Kounoike, Mitsui, and Kajimaya. Contrary to popular belief that Mitsui was in financial straits by the end of the Edo era, the real situation of Mitsui was promising when the draft business was taken into account.

Although many moneychangers went bankrupt during the Meiji Reform, a considerable number of them survived the phase. Additionally, many powerful newcomers such as Chojiya, Nunoya, and Yasuda began operating during this period. Some of these moneychangers even established modern banks. The most important suppliers of capital for the industrialization in Japan were the merchants, both old and new, headed by moneychangers.
Rethinking the Economy at the End of the Edo Era:
with Special Attention to Settlement of Transactions by Drafts

Kanji Ishii, M. J. A.

The industrial revolution in Japan in the latter half of the 19th century, the first industrial revolution in Asia, did not depend on foreign capital until 1899, when the Japanese government called off the prohibition on foreign capital investment. This change was a result of Japanese law courts beginning to consider the crimes of foreigners in Japan.

Even after 1899, the amount of foreign capital used in private enterprises within Japan was unexpectedly small. In 1914, only 7% of all stocks and debentures of private enterprises were foreign-owned. How did Japanese entrepreneurs then raise money for industrialization?

Big enterprises raised money domestically through joint-stock companies. The stockholders invested not only their own money but also money borrowed from banks using their stocks as security. Most stockholders were merchants and financiers, including those who started their businesses in the Edo era. Although the loan business with the merchants set up by the biggest moneychangers, such as Mitsui and Kounoike, was said to be declining toward the end of the Edo era, it is notable that the draft business, which promoted modernization of the economy, was growing.

In Japan, payment to distant clients by bills of exchange began in the 13th century, and payment to nearby clients by such bills began in the 17th century. However, Japanese moneychangers did not develop a business around discounting bills because Japanese merchants did not use terminable promissory notes.

In this paper, I first discuss cases of settlement of transactions involving cotton goods and fertilizers between Owari (present-day western Aichi Prefecture) and Edo (present-day Tokyo) by bills of exchange. I also discuss cases of settlement for trade of cotton goods and tea between Yokohama and Kamigata (present-day Osaka and Kyoto) by bills of exchange. The latter cases were important in keeping foreign merchants from making inroads into Japan’s market. It also led to Japanese merchants accumulating capital via cash payments with foreign merchants in Yokohama.